女優と劇作家

岸田國士

劇作家が自分の恋人を其の作品の女主人公にすることは、極めて有り得べきことである。しかしまた、或る作品の女主人公に扮した女優が、その作品の作者と恋愛関係に陥ることも稀ではない。なほまた、劇作家が自分の恋する女優の為めに、彼女自身をモデルとして作品を物することも屢々あるに違ひない。

此の場合、凡庸な作家とおちやつぴい女優との関係は固より問題とするに足らないが、少くともその一方が、才能ある劇作家、世に時めく女優である場合には、相当に興味もあり、話の種にもなるといふものである。殊に、恋愛関係の有無に拘はらず、劇作家は女優の才

能によつて、女優はまた劇作家の天稟によつて、それぞれ芸術的霊感を与へられ、之が為めに輝やかしい前途を見出すといふやうなことは、誠に大慶至極な話である。

例を日本に求めることは、さほど困難ではないが、これは読者諸君がとつくに御承知のことゝ思ふから、こゝでは世界の女優国、仏蘭西に例を取つて、思ひ出すまゝを記して見る。

仏蘭西の劇作家でも、モリエールほど浮名を流した劇作家はあるまい。彼は劇作家であると同時に俳優で

ある。彼は四十歳の時に二十年来の情人にして一座の女優たるマドレエヌ・ベジャアルの娘、アルマンドと結婚した。それが問題になつた。然し、アルマンドが自分の血をわけた娘でないことぐらゐはモリエールも知つてゐたらう。此のアルマンド、一代の喜劇作者をしたゝか悩ました女である。

「わたしがいくら気をつけてゐても、彼女のわたしに対する冷やかな態度は増すばかりであつた。……彼女の心はわたしの心から離れて行つた。わたしは夫として不自然と思はれるほどの気兼ねをした。彼女の愛情に不満を感じるのは、彼女が機嫌の悪い時だ、と自分

を慰めようともした。然し、わたしは誤つてゐた。その誤りを知るためには多くの方法があつた。わたしは平静を装つてゐることができなくなつた。彼女は、その頃、ギイシュ伯爵に夢中になつてゐたのだ。

わたしはそれを知つた時に、自分を制御しようと努めた。が、それは不可能なことだ。わたしは、そのために、あらゆる精神的努力を傾倒し尽した。わたしは、あらゆる慰藉の手段を探し求めた。処が、わたしが教育した女が、少しの才能もなく、少しの美しさもなく、そして、その女が、わたしの人生観を根柢から覆したと思ふ時、わたしは悲嘆にくれた。それでも、彼女が、

自分の潔白なことをわたしに告げた最初の言葉で、わたしは、わたしの疑ひが不合理であることを感じた。わたしは彼女に冤しを乞うた。

然しながら、わたしの態度は、少しも彼女の心持を変へることはできなかつた。わたしは苦しい。わたしを憐れんで下さい。わたしの情熱は、彼女の利害に同情を持つほどまでに進んではゐた。なるほど、父として彼女を愛することはいゝことかも知れない。然し、わたしは、一つしか愛し方を知らないのだ。一つしか愛し方はないと思つてゐる。……」

これは、当時、「評判の女優」といふ標題で発行され

たパンフレツトの中に、モリエール自身の告白として掲載されたものである。その真偽はしばらく措き、モリエールは一生涯、浮気な妻の為めに、あらゆる苦痛と屈辱とを味つた。そして、この苦悶の中から、この惨澹たる生活の中から、傑作「人間嫌ひ」を生み、「妻を寝取られる妄想」を生み、「ジヨルジユ・ダンダン」を生んだのである。彼が美しい女優を妻にしなかつたら、仏国戯曲史から少くとも三つの名作が減つてゐたらう。

モリエール一座に、シヤンメエレといふ女優がゐた。

その容姿について伝へるところは少いが、悲劇の女主人公として当代並ぶもののなき名優であつたらしい。モリエールの許に出入する若い詩人のうちに、ジャン・ラシイヌがゐた。モリエールとシャンメエレとの関係は詳かでないが、ラシイヌは、シャンメエレに眼をつけた。悲劇作者として当然のことであるが、その当然さは、彼女をモリエール一座から奪ひ取つて、別の一座を組織させるに至つて甚だ当然でなくなつた。やがて悲劇「アンドロマアク」は、名女優シャンメエレの手によつて空前の成功を収め、ジャンをして一躍十七世紀に於ける大作家の名を成さしめた。モリエールは

ラシイヌと絶交した。ラシイヌとシャンメエレとの関係も長くは続かなかつたらしい。天才ラシイヌは、これまた稀代の恋愛師であつた。

下つて十八世紀になる。ラシイヌの恋愛悲劇に比すべき恋愛喜劇の名作家、ピエール・ド・マリヴォオは、その数多き作品の女主人公に、屢々シルヴィヤの名を与へてゐる。そのシルヴィヤの名こそ、当時伊太利座の花形女優ジォヴンナ・ロザ・ベノッチの芸名である。彼は、その作品の女主人公に、常にその役を演ずる女優の名を、そのまゝ与へてゐるのである。執心のほど

推して知るべしである。

彼女の「髪は黒く、眼は空色」であつた。

彼女は或る時、一無名作家の手になつた「愛の奇襲」の中で女主人公に扮したが、「どうしても人物の細かい気持ちを捉へることができない」ので、一度その作者に会つて見たいと思つた。彼女は当年二十二歳である。

マリヴォオはかくてシルヴィヤの友となつた。友以上にはならなかつたか。それは誰も知らない。サント・ブウヴは、早計にも「彼女は心の友を得た、然し、彼女には情人はなかつた」と断言してゐる。

マリヴォオは彼女の誕生日に讃歌を作つた。その中で、彼は「彼女のつれなさ」を恨んでゐることは事実である。これは「優しき謎」である。要するに、読者は、マリヴォオはシルヴィヤの為めに、シルヴィヤはマリヴォオの為めに、得がたき「芸術の鼓吹者」であつたことを知ればよい。それと同時に、マリヴォオの描く恋愛は、所謂マリヴォオ式の突いたり引いたり、短気な野郎には我慢の出来かねる場面の連続であることを知れば、一層面白いに相違ない。

十八世紀の始め頃、美貌と才能とを一身に集め、巴

里の上下を沸き立たせた女優にアドリエンヌ・ルクウヴルウルがある。

当時二十五歳のヴォルテエル、早くも之に心を動かし、彼女の為めに平凡な悲劇「アルテミイズ」を書き卸した。そして、彼女を「わが憧るゝ天使」と呼びかけた。如何に頭が良くてもまだ白面の一書生、その憧るゝ天使の後ろに、広大なる領地と数万の軍兵とを擁するサツクス公爵がついてゐることは知る由もなかつた。

時は過ぎる。ヴォルテエルの頭には白髪が見え出し

た。彼は丹念に悲劇を書き続けた。　平凡な悲劇を書き続けた。博学多芸、古今の才物も、詩の女神と舞台の花には縁が薄かつたらしい。それでも、彼は、五十五だ。その頃国立劇場の星座に輝くクレエロン嬢に胸を焦がしてゐた。
「わたしの可愛いクレエロン、どうか二日でも三日でも、わたしの為めに生きることを承知して下さい。わたしの命は、残つてゐる命は、悉くあなたの為めに捧げます」と書き送つた。
返事？　さあ、それは見たものがない。

ヴィクトオル・ユゴオは厳めしい小父さんである。女優風情に眼はくれない。時の名女優マルス嬢は同時に国立劇場の暴君であつた。彼女はその生涯を通じて、「愛せられる以上に愛した」と伝へられてゐる。第一負け嫌ひである。自分より美しいと思ふもの、自分の名声を少しでも外らすやうなものは、用捨なく排斥した。

ユゴオは、その作「アンジェロ」の上演に当つて、他の劇場からドルヴァル夫人といふ女優を選んで、マルス嬢の相手役を演らせることにした。此の女優、ユゴオの眼にとまつただけあつて、なかなかの才女であ

る。
　稽古中の或日、ユゴオの注意が動もすれば多くドルヴァル夫人の方に払はれるのを見て、マルスは黙つてはゐられない。
「先生、如何です、町の小屋に出る女優がお気に召しましたか」
「いや、申し分ありませんな。気だてはよし、淑やかではあり、才能も十分あり……」
　その次の稽古日に、また同じ問を受けたユゴオは、とうとう癇癪玉を破裂させた。
「申し分がないどころぢやありません。一つあなたの

役をドルヴァル夫人に演つて貰つて、先生の役をあなたにやつて頂かうかと思つてゐる位です」
するとマルス嬢も負けてゐない。
「へえ、それで、あたしが承知すると思つていらつしやるんですか」かう云つたまゝ、ぷいと出て行つてしまつた。

十九世紀の初めに、これも男勝りの女優として知られたブウルグワン嬢は、また同時に、同じ批評家から褒められたり貶されたりすることで有名であつた。
中にも、当時の勢力ある批評家ジェッフルワは、最

初口を極めて、若く美しい彼女の才能を賞揚してゐたが、どうした機会か、急に酷い批評を浴せかけるやうになつた。彼女は、堂々とその理由を発表して、「あたしがあの人の云ふまゝにならなかつたから」だと宣言した。

是れを見て、ジェッフルワは苦笑しながら傍らのものに呟いた。

「おれは男とは寝ないよ」

アルフレッド・ド・ヴィニイの傑作「チャッタアトン」を演じて非凡の才能を示した女優マリイ・ドルヴァ

ルは、俳優であつた最初の夫に死に別れて、メルルといふ若い劇作家と結婚した。メルルは前途の光明を見つめつゝ、不治の病に罹つて起つことが出来なくなつた。

彼女の半生は病める夫への美しい犠牲であつた。彼女は、前に述べたマルス嬢の嫉妬を受けて国立劇場を追はれ、オデオン座に入つた。彼女はあらゆる生活の辛苦を嘗めながら、舞台に流す涙の残りを夫の枕頭に注いだ。

彼女は、一切の誘惑に打克つた。そして、ヴィニイが云つた如く「理想の純潔さ」の中に夫の後を追つた。

どうです。かういふ女優もあります。（尤も此の女優については、全然これと反対な風説もある）

フェイ・ヴォルニイといふ女優は、同時に熱烈な加特力教的詩人であつた。デュマが、自作「カリギュラ」の主人公、メリサンヌの役に彼女を推した時、彼女は、断然之を拒絶した。「正しい女は、さういふ穢らはしい役に扮することを恥ぢなければなりません」

彼女は心臓病で将に息を引取らうとする時、静かに眼を見開いてかう呟いた。

「イエス、マリヤ、どうか、あなたの平和と愛の天国で、わたしに美しい役を演じさせて下さい」

今は故人となつたアンリイ・バタイユの愛人は誰も知るイヴォンヌ・ド・ブレエ嬢である。バタイユは彼女の為めに書き、彼女は彼の為めに演じた。

バタイユが急病で斃れた時――それはブウロオニユ街の美しい並木に添つた宏大な邸宅である――イヴォンヌ嬢は入浴中であつた。慌たゞしい家人の足音に、部屋着を肩にかけたまゝ、アンリイの寝室に飛び込んだ。彼はもう口を利かなかつた。彼女は一生に一度、

ほんとうに泣き狂つたと伝へられてゐる。

彼女は舞台を退く決心をした。が、一年後、亡き情人の自伝劇「裸体の女」を提げて再び巴里の舞台に現はれた。

フランスワ・ポルシェは、古典的な気品と、浪漫的な情熱と、近代的な冥想とを併せ備へた新進劇詩人である。

彼が今日の位置を築き上げ、逆つて、その進路を見出したについては、甚だ興味あるエピソオドが伝へられてゐる。

彼はもと抒情詩人である。欧洲戦争中、マルヌの勝利を歌つた彼の詩が、ソルボンヌで行はれた戦勝祝賀会席上で、コメディイ・フランセエズの花形シモンヌ夫人によつて朗読された。聴衆の熱狂的拍手に涙ぐむまで胸を躍らした青年詩人ポルシェは、満腔の感謝を捧ぐべく直ちにシモンヌ夫人を訪れたのである。

彼女は親愛な弟に送る微笑を以て彼を迎へた。そして彼女は云つた。

「いゝえ、それは、あなたの詩が人を撃つ力をもつてゐるからです。あなたの詩から受ける感激は美しい戯曲のもつ魅力です。あなたが劇をお書きになれば、き

つと佳いものができるでせう」

ポルシェは、此の時、豊麗なシモンヌ夫人の姿を透して、彼の「女主人公」を見た。

処女戯曲「鷺の群とフィネット」が間もなくコメディイ・フランセエズで演ぜられた。

やがて、シモンヌ夫人は、同僚にして夫たる某氏の許を去つた。そして、自分の見出した才能の中に、新しい第二の生活を托するに至つた。新進劇詩人フランスワ・ポルシェと、当代の名女優シモンヌ夫人との結婚は、一時巴里の劇壇を騒がせた。

サラ・ベルナアルといへば誰も知る近代の名女優、エドモン・ロスタンの「雛鷲」で、すばらしい小ナポレオンを演じたが、エドモンの歿後、その息モオリスを庇護し、天晴れ父の名を恥かしめぬ劇作家に仕立てやうとした。

八十の老女優と二十いくつの若い詩人とは母子以上の親みを見せた。

此のモオリスの詩劇「栄光」に現はれる女神の姿は、西山に沈む夕陽の美しさであつた。

サラ・ベルナアルの葬式は巴里人の眼を見はらせた。例の薔薇の樹の柩の前で、フロック姿のモオリスが、

あたり憚らず、声を上げて泣いてゐたことは、更に巴里人の好奇心をそゝつた。

兎も角も、女優といふものは、おそろしい両刀使ひである。ナポレオン以後仏国三代の帝王を撫斬にした女優がゐる。劇作家などは、手近に居合はす雑兵の類であるかも知れない。

底本：「岸田國士全集20」岩波書店
1990（平成2）年3月8日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
1926（大正15）年6月20日発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志、小林繁雄
2006年2月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。